

随 想

スリランカの世界遺産とペラヘラ祭り

佐々木 教祐

スリランカはインドの先端のインド洋に浮かぶ北海道の8割の大きさの島国で長く内紛が続いたが、2009年に内戦が終結し復興の途上にある。そこでセイロン紅茶のふるさとを体験し、華やかに着飾った象の行進で有名なペラヘラ祭りに合わせて2月の初めスリランカを旅した。

1948年イギリス連邦セイロン自治領として独立し、1972年に共和国として、もともと国民に呼ばれていた「スリランカ」と改称した。「スリ」は「光り輝く」、「ランカ」は「古くからこの島を示す固有名詞」を意味する。1978年に現在の正式国名、スリランカ民主社会主義共和国に改称した。首都はスリー・ジャヤワルダナプラ。1985年にコロomboより国会議事堂を移転し、遷都したとはいえ、コロomboの中心からわずか13kmほどしか離れていないし、ほとんどの政府機関はコロomboにある。スリランカの人口2050万人の約7割を占めるのが、インド北部のアーリア系を先祖にもつシンハラ人。そして、シンハラ人に次いで多いのが、インド南部から移住してきたタミル人だ。タミル人は人口の約2割を占め、北部と東部州に多く住む。それぞれシンハラ語とタミル語という異なる言語をもち、宗教はシンハラ人のほとんどが仏教徒であるのに対し、タミル人はヒンドゥー教徒が多い。またスリランカ第3の民族は、人口の8%を占めるムーア人と呼ばれる人たちで、スリランカに住むイスラム教徒である。スリランカで多数を占める仏教徒たちは、満月の日を「ポヤ・デー」と呼び、労働を断って1日体を休め、寺院へ参拝する聖なる日としている。この日は国民の休日で、役所や銀行も閉まる。またアルコール類はご法度で、スーパー等でも買えなくなる。スリランカの輸出3大商品は、紅茶、天然ゴム、ココナッツ。紅茶はセイロン・ティーとして名高く、また宝石も有名で、ダイヤモンドは採れないものの、アレキサンドライト、キャッツアイ、サファイヤ、ルビー、ムーンストーンなど数多くの種類が産出する。スリランカの食事と云えばカレーが基本で、日本のカレーのように、ご飯の上にかけて食べるのではなく、肉・魚・野菜などを煮込んだ何種類もあるカレーをご飯の周りを取り、それを手でかき混ぜて食べる。美味しく食べるのは自分の味に混ぜあわせるのがコツらしい。スリランカの食卓はすべてカレー味である。

主食は細長いばさばさのご飯。その他、お米からできる麺、ホッパーというクレープの皮のようなものもある。

私たちの旅は、中部国際空港からタイ航空でバンコクまで6時間45分、さらに3時間25分かけてスリランカのコロンボに着く。気温は30度くらいで、1年を通してほとんど変化はない。

2日目、コロンボから北東に向かう1号線をポロンナルワへ向けて走る。本日2月4日はスリランカの独立記念日で、今年はイギリスから独立して64周年、大統領が参列する式典が最初の古代王都アヌラーダプラで開かれるので、それを見物に行く車で渋滞していた。道沿いに、ヤシ、バナナ、マンゴーなど南国の豊かな果物が見られた。バナナは小ぶりでホテルでも出されたが、甘く美味しい。7時間かかってポロンナルワに着き、遅い昼食の後、世界遺産のポロンナルワを見学した。10世紀末タミル人の侵略によって、アヌラーダプラを追われたシンハラ王朝が2番目の都にしたのがここポロンナルワである。まずクワドラングルと呼ばれる城壁の中には12の遺跡が集まっており、円形の仏塔遺跡の「ワタダーゲ」を中心に、旧仏歯寺跡もある。スリランカで仏教遺跡を見学するときは、入口で靴を脱ぎ、土の上も裸足で歩き、仏様にお尻を向けて写真は撮らないことが鉄則である。ポロンナルワ保護区の北端のガル・ヴィハーラ寺院には岩から彫り出された独特の顔を持つ14mの巨大な涅槃像、6.9mの立像、4.6mの坐像と顔の違う等身大の窟内に収められた座仏像がある。スリランカの人々が最も愛しているのがこれらの像だが、素朴で穏やかな顔が多くの人々を魅了し続けてきたのだろう。

スリランカの世界遺産はほとんどが仏教遺跡で、仏教は上座部仏教すなわち上座に座る人々、長老を中心に運営される出家集団を基盤として、個人の修業を重んじる傾向が強い。スリランカの歴史書「マハーヴァンサ」（5世紀編纂）によると、紀元前3世紀、インドのアショカ王が息子のマヒンダをスリランカに遣わし、ミッサカ山で狩りをしていたデーヴァナンピヤ・ティッサ王に出会い、言葉を交わすうちマヒンダの説く仏教世界にたちまち惹かれ、この王がスリランカで最初の仏教徒となった。王の帰依を知ってマヒンダ長老の下に多くの人が出家を望み、仏教国の基礎となる僧の集団ができたと云う。その後、タイやミャンマーの仏教に大きな影響を与えることになる。

3日目、シギリヤへ向かう道は、国立公園の近くを通るので途中野生の象に出会った。国土の10%近い面積を国立公園や自然保護区が占める野生の王国で、象、ワニ、ヒョウ、クジャクなどが住む。トイレ休憩を取ったレストハウスから緑のジャングルの中に忽然と突き出しているシギリヤ・ロックを眺めてから、

いよいよシギリヤに向かう。シギリヤは周りに堀をめぐらせ戦いのための城という趣である。この城を建てたのは、5世紀の後半にほんの18年間この地を治めた狂気の王カーシャパであり、中央に180mほど垂直につき立っている岩の上に王宮を建てて過ごした。岩に貼りつくように設置された急な階段を少し上っていくと、岩のくぼみに美女のフレスコ画が見える。5世紀ころの作品とは思えないほど色鮮やかに18人の「シギリヤ・レディー」と呼ばれる美女が描かれていた。最初はたくさんの美女が描かれていたとの落書きがあるが、風雨にさらされて今はこの一角に残るだけだ。

事の起こりは、5世紀の名君、ダーツセーナ王を父に持つ二人の異母兄弟の王位継承にかかわる悲劇である。兄カーシャパ王子の母は身分の低い第二夫人で、弟モッガラナ王子は王族出の第一夫人の子だった。王の娘を妃に迎えていたが王とギクシャクした関係にあった義兄の策略にはまり、カーシャパ王子は名君と謳われていた父を殺してしまった。王になったカーシャパは弟の仇討を恐れると同時に、深く罪を悔い、シギリヤの岩山の頂上に宮殿を建て、立て籠もったと云われている。そして18年間仇討の機会を狙っていた弟のモッガラナは、南インド軍を援軍につけ、シギリヤに攻め込み、カーシャパは自決し、この悲劇の幕が下りた。

さらに登ると広場に出る。シギリヤとは「獅子の岩」の意で、この広場から宮殿に登る入口には巨大なライオンの足が刻まれている。かつては獅子の全身があったという。そこから続く急な鉄の梯子を登りきると360度開けた頂上に出る。頂上1.6ヘクタールほどには当時の宮殿跡があり、沐浴場、会議場、王座などが残っている。天気も良かったので、頂上からは遠くの山々や眼下の庭園跡などが素晴らしかったが、やはり無常感も漂っているように思われた。

シギリヤから2時間ほど走るとダンブッラの町に着く。ここに世界遺産の石窟寺院がある。紀元前一世紀ワッタガーマニー・アバヤ王が最初に開窟したと云われ、巨大な岩山は180mほどの高さがある。坂を登って門のところで靴を脱ぐと巨大な岩の塊が見える。岩には横穴が掘られ、第1窟から第5窟まである。その中をさまざまな時代の王たちが仏像や天井画で荘厳にした。第1窟と第3窟に涅槃像がある。天井のフレスコ画は何度も上書きされたものだが、色鮮やかに仏教世界が描かれていた。また仏像は新しいもののようだが、埋め尽くされた数に圧倒された。石窟を出たとき空には雨を伴った黒雲が迫ってきており、バスに駆け込むと激しい雨が叩きつけるように降り始めた。南国特有のスクールだ。

4日目、標高1900mほどにある、上質な紅茶の産地ヌワラエリアを訪れ、山

を隙間なく埋める茶畑を眺め、紅茶の製造工場を見学してから、出来たての紅茶を味わった後、お土産の紅茶を買ってヌワラエリアを後にした。

5日目、キャンディ市内にあるお釈迦さまの歯のある仏歯寺に向かう。この仏歯は、紀元前543年火葬されたお釈迦さまの犬歯で、4世紀に南インド・カリンガ国の王女が嫁ぐときに持ってきたと云われるもので、その後仏歯は王家が直轄管理する最も大切な礼拝物として、王都と共に仏歯寺も移動し、現在はこの寺の黄金の容器に安置されている。堂内には、9時30分ころから行われる仏歯の部屋が開扉されるプジャ(仏様への礼拝)を待つたくさんの人々が堂内を埋めていた。私たちは今夜開かれるコロomboのペラヘラ祭りを見学するためプジャに参加せずバスでコロomboに向かった。途中でピンナワラにある、弱ったり傷ついたりした象を治療する象の孤児院と呼ばれる施設を訪れた。さらにバスを走らせコロomboでペラヘラ祭りを見学した。ここのペラヘラ祭りはガンガメラ寺院が主宰するお祭りで今年は2月のポヤデーを含む6~7日に行われ、33回目である。このお祭りは、もともと仏歯寺が主宰するお祭りで、中国の僧、法頭が5世紀初頭にスリランカを訪れた時にすでに行われていたと書いている。7月に行われるキャンディのペラヘラ祭りが盛大で有名だ。

ガンガメラ寺院の長老が唱える読経のなか鞭を持つ先払いから始まり、踊りと電飾された衣装をまとった象の行進、小型トラックに乗った仏様の行進、仏歯を乗せた象の行進、火の輪くぐりや伝統の仮面踊りなど延々と2時間半行列が続いた。次々に行進してくるきらびやかな衣装の集団の踊りを時を忘れて堪能した。

6日目は、昨日ペラヘラ祭りを主宰したガンガメラ寺院を訪れたが、そこには立派な菩提樹の木が中庭に植わっていた。アヌラーダプラにはアショカ王の妹がインドのブダガヤ(ブダ悟りの地)から分枝した聖なる菩提樹が今も残っている。寺院内の博物館には信者や各国から寄進された仏像のほか色々なものが展示されており、日本からの仏壇もあった。夜遅くにコロomboの空港からバンコクを経由して、中部国際空港に帰国の途についた。

(名古屋大学名誉教授)